編集後記

『部落解放研究』第九号をお送りする。今日の社会情勢にあって、当研究所の研究活動が部落解放と人権確立の闘いのための、理論と方法を提起するものとなっているか。また、本誌がその集約的な表現の場となっているか。身の引き締まる思いである。

本誌は、現代政治・思想の批判、民族問題の研究、歴史・教育・宗教の各部会の主題に関わる諸研究と対談、および資料紹介から成る。小森論文は、世界及び日本の政治・思想状況が胎む問題を批判し、それを見抜き抗うべき人間主体の条件を提示した。奥山論文は、イスラエルのパレスティナ人抑圧の構造と、パレスティナ人の戦いの不可避性を実証的に明らかにした。森島論文は、部落解放運動を攻撃し、差別行政を進める自治体首長の反動的イデオロギーを批判し、それと闘う者が何を知るべきかを提示した。小早川論文は、近代都市における被差別部落の形成と部落差別との闘いの史的過程を辿り、私達が学ぶべき「原点」を明らかにした。村澤論文は、「部落の子ども」と「学力」の関係を実証的に分析し、「部落」という構造的差別カテゴリーの機能（部落差別の事実）を明らかにした。宗教部会のシンポジウム再録では、仏教の哲学・教義・体制が胎む差別性が批判され、「差別からの解放」の人間的条件が提示された。最後に資料紹介として、在日一世の聞き取りが収められた。在日一世の苦闘の歴史は、記録され、私達の記憶に刻まれなければならない。聞き取りの一層の蓄積が期待される。

いずれの論文も、現代の人間的状況に関わる緊要な問題を衝いている。それぞれ、さらに議論を深めたいとの意欲を誘う。研究所の研究活動をさらに旺盛に、豊かになし、その成果を次号に繋げたいと思う。とくに本年度、待たれた教育部会の活動が緒についた。中身と体制づくりはこれからである。真実としての事実を解明して突きつける・・今日の教育の状況なればこそ、本誌がそのような批判知の表現の場となることが期待される。

（A）